

「う～ん...」

「(ラベンダーとベルガモットのブレンドでよく眠れたって言うてくれたけど...
なんか、物足りない、ような...)」

「(マッサージとアロマテラピー...どっちもちゃんと効果はあった。
でも、それって...ちょっと、普通っぽいというか...)」

「(私は仮にも先輩の『彼女』なんだから...もっと、恋人にしか出来ないような方法で、先輩をリラックスさせてあげられないかな...?)」

「う～～ん...」

「...えっと、『彼氏』『リラックスさせる方法』...検索、っと」

「マッサージ...膝枕...そういうのじゃなくて、もっと何か...あっ」

「『ハグをするとストレスが減る』...これとか、いいかも...
ちょっと恥ずかしいけど、恋人って感じがする...」

「...あれ?この記事、続きが...」

「先輩、お疲れ様です。あの...今日、先輩のお家にまた行ってもいいですか?」

「あ、いえ...今日はアロマじゃなくて...他に、やってみたい事があるんです」

「...ありがとうございます。じゃあ...また後で」

「あ...先輩。みのりです」

「あ、さっき学校ではアロマじゃないって言ったんですけど、一応精油は持ってきたので、この前の...
まだ使うようだったら、作っていきますね」

「効果がすごくあったみたいで良かったです。
実はあの後、私も同じブレンドを使って...先輩と同じ匂いを嗅ぎながら寝てたんです...」

「そ、そうです...だから私も、最近よく眠れて...朝すっきり起きられるのはすごくいいですよ」

「えっと...それで、今日はちょっと、違う方向で、先輩にリラックスしてもらいたいな、と思ったんですけど...」

「その...ネットで調べたら、ハグをするとストレスが減るって書いてあって...
なんでも、ハグをすると、『オキシトシン』っていう幸せホルモンが出るらしいんです」

「それで安心感が得られて、ストレスが3分の1も減るそうですよ」

「...先輩、最初はストレス解消も兼ねてASMRを聞いてたって言ってましたし...
これは効果があるんじゃないかな、と思って...」

「あと...そ、その...」

「...ハグだったら、恋人の私にしか出来ない事かな、って...」

「っ...そ、それで、してみようかって...思った、んですけど...ど、どうでしょうか、先輩...」

「ふふっ...先輩なら、そう言うてくださると思っていました。えっと...じゃあ、早速...」

「先輩...来て、ください...」

「っ.....」

「(...分かってた事だけど、ドキドキする...こんなに先輩が、近くに...)」

「せ、先輩...どうでしょうか？オキシトシン、出てますか...？」

「あはは...分からないですよ、いまいち。えっと...じゃあ、もうちょっと...強く、抱き締めます...」

「先輩...目を、閉じてみてください...意識を私の方に集中して...私も、先輩に集中するので...」

「ん.....」

「(何も見えないけど...そのお陰で、色々な事が分かる...
先輩の心臓もバクバクしてるし、腕が少し震えてる...緊張、してるみたい...)」

「(それに...先輩の匂いがする...)」

「(ちょっと汗っぽいけど、臭いわけじゃなくて...先輩の体臭なのかな。
そこに...えっと、少しだけ...ほんのちょっとだけ、ラベンダーとベルガモットの匂い...)」

「(アロマストーン、毎日使ってくれてるから...髪に匂いが移ってるのかも...
本当に、ちょっとだけ、だけど...)」

「んんう...すん、スンスン...くんくん...くん、くん」

「.....ふふ、先輩に力を抜いてもらいたいと思っていたのに...
なんだか、私の方がリラックスしちゃってる気がします...」

「先輩も、もっとリラックスして...私に身体を預けてください...ふふっ...」

「(そういえば、マッサージと合わせるのもいいんだっけ...
この体勢だと、揉んだりするのは難しいけど...)」

「んっ、しょ...」

「こうすると、安心感が増すらしいです...ぽんぽん、ぽんぽん...ぽんぽん...」

「先輩...気持ちいいですか？
ふふっ...それから、撫でるのもいいらしいんです...」

「さすさす...さすさす...
先輩の背中、広くて...私の手じゃ、届かないところもありますね...」

「ん...さす、さす...ぽんぽん...さすさす...さすさす...ぽん、ぽん...」

「...リラックス、してきました？
あはは...確かに、こうされるとちょっと眠くなっちゃいますよね...」

「先輩、部活も頑張っていて偉いから...疲れて眠くなっちゃうのも分かります。
勉強と部活、両方頑張ってストレスも溜まってると思いますし...」

「私は...こんな事しか出来ませんが...
少しでも先輩のお力になれているのなら、何よりです...ふふっ...」

「ぼんぽん...ぼんぽん...ん、んっ...さす、さす...さすさす...」

「先輩は...いっぱい頑張ってる、偉いですね...
ふふっ...私、そんな先輩の事...すごく、大好きです...」

「ん...さす、さす...さすさす...、.....ふふっ...」

「(あ...ちょっと、心臓の音...落ち着いて、きちやった...)」

「っ...」

「...あ、あの...先輩。私、実は...他にも、色々調べてて、...その...」

「キ...キスにも...精神を落ち着かせる作用があるらしくて...
だから...してみても、いいですか...?」

「もちろん...先輩が、嫌じゃなかったら、ですけど...」

「...!分かりました...じゃあ、先輩...」

※キス10秒

「ん、っ...ちゅ...んんう...!」

「...っ...ど、どう、ですか?落ち着けそうですか...?」

「...あ、あはは...私も...無理だって思っていました。
だって、私...今、こんなに...心臓がバクバクうるさくて、ドキドキしてるんです...」

「でも...すごく、幸せにはなれました。
キスには本当に、ハグ以上の幸福感を得る効果があるのかも、ですよ...?」

「.....」

「...も、もう1回...して、みますか...?」

※キス15秒

「ん...ちゅ...ん、っ...ふ、はっ.....んんっ...」

「...ん、あ...せんば、っ...」

※キス40秒

「っ...!んっ...ふう...ちゅっ...ちゅう...ん、ちゅ
ちゅふう...ちゅっ、ちゅっ

ちゅう、ちゅう...ん、ぶちゅっ...

は、あっ...ん、ん...せんば...っ、ふ、あ...っ

んふう...ちゅ、う...
ちゅっ、ちゅっ...ちゅうう...

ん、ふう...ちゅ、ちゅう...
ちゅく...んん、っ...ちゅくう...

んっ...あ、ふう...ん...ちゅっ...ちゅう...
んん...ん...ふう...ちゅっ、ちゅ...

「...っぷあ！先輩...好き、大好きです...私...もっと、先輩と一緒にいたいです...」

「もっと先輩の事...癒させて、ください...」